

# 新3省令をめぐる幼児の表現についての一考察

## － 新小学校学習指導要領との関連から －

山 本 齊

松山東雲短期大学

## One consideration about the expression of the infant over the new 3 departmental order

### － Over connection with new point of the learning instruction －

Masashi YAMAMOTO

*Matsuyama Shinonome Junior College*

*Kuwabara, Matsuyama*

*(Received Jan. 18, 2019)*

### Summary

The kindergartens education point and the nursery schools childcare guidance were notified in March, 2017 and were taken effect in April, 2018. It is similar about the cooperation type child garden of kindergartens and the nursery schools. The elementary school course of study is revised with these 3 departmental orders, too and is going to be taken effect in notification, 2020 in April, 2017. In the kindergartens education point, I compare the revision of 2009 when taken effect, and the big change is not seen, but, about the nursery schools childcare guidance, “the development of the child” of Chapter 2 is deleted and can raise a large change point. About the cooperation type child garden of kindergartens and the nursery schools, it was revised to the development age of the infant to the contents which developed the characteristic of both. On the other hand, three common items are provided to three persons as “nature, the ability that I want to bring up” and can feel the aim that is going to plan reciprocity and the cooperation with the kindergartens because they particularly specify it in the childcare guidance with “facilities performing preschool education” about nursery schools. I realize “the power to live” for intellect, virtue, the body more, and three common items which “nature, the ability that I want to bring up” of three facilities includes are common with nature, the ability of the elementary school course of study to aim at upbringing through the whole curriculum.

I consider the way of the expression activity of the infant and the instruction method while going round reciprocity of kindergartens and nursery schools which advanced remarkably from 2018 and the connection with the new course of study of a connected elementary school by the main subject.

## はじめに

幼稚園教育要領と保育所保育指針は、平成29年3月に告示され平成30年4月から施行された。幼保連携型認定こども園教育保育要領についても同様である。これら3省令と同時に小学校学習指導要領も改訂され、平成29年4月に告示、平成32年に施行される予定である。幼稚園教育要領においては、平成21年の改訂施行されたときと比較し、大きな変更点は見られないが、保育所保育指針については、第2章の「子どもの発達」が削除されるなど、大幅な変更箇所を挙げることができる。幼保連携型認定こども園教育保育要領については、幼児の発達年齢に合わせ、両者の特性を発展させた内容へと改訂された。一方で三者には、「育みたい資質・能力」として3つの共通の項目が示され、殊に保育指針においては、保育所について「幼児教育を行う施設」と明記していることから、幼稚園との相互性や連携を図ろうとするねらいを感じることができる。三施設の「育みたい資質・能力」としてある3つの共通の項目は、知・徳・体にわたる「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す小学校学習指導要領の資質・能力とも共通する。

本論では、平成30年度から著しく進んだ幼保の相互性と、接続される小学校の新しい学習指導要領との関連をめぐりながら、幼児の表現活動のあり方やその指導方法について考察する。

## 1. 研究の目的

平成29年4月に、文部科学省初等中等教育局より教育課程部会の資料として、新しい学習指導要領の方向性が示されている。幼児の表現活動に関わる箇所を抜き出し、以下にその改訂の要点を記す。

1. 現行の小学校学習指導要領で掲げられた「生きる力」を資質・能力として具体化し、「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけ、新幼稚園教育要領では、①知識及び技能の基礎、

②思考力、判断力、表現力等の基礎、③学びに向かう力、人間性等を三つの柱として明確にした。

2. 5歳児修了時までには育ってほしい具体的な姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、「豊かな感性と表現」を獲得することを明確に示した。

一方、社会保障審議会児童部会保育専門委員会（保育専門委員会）では、平成28年12月に保育所保育指針の改定に関する議論をとりまとめ、平成29年に新指針の告示がおこなわれている。新しい保育所保育指針の方向性は、①乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載の充実、②保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけ、③子どもの育ちをめぐる環境の変化を踏まえた健康及び安全の記載の見直し、④保護者・家庭及び地域と連携した子育て支援の必要性、⑤職員の資質・専門性の向上等である。これらは同時期に施行された新しい幼稚園教育要領とほぼ同じ方向性を示している。殊に②保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけについては、「第1章 総則 4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項（1）育みたい資質・能力」として、新幼稚園教育要領と同じ文言の三つの柱を掲げている。

また、内閣府特命担当大臣決定に基づき設置された幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂に関する検討会での審議の結果を踏まえ、幼保連携型認定こども園教育・保育要領も改訂され同時期に施行された。その改訂の要点を以下に記す。

1. 「育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」など、新幼稚園教育要領と新保育所保育指針との「整合性の確保に配慮」した。
2. 教育と保育が一体的に行われることを、新要領の全体を通して明確に記載した。
3. 「多様な経験を有する園児の学び合い」の項目を記載した。

以上の新しい3省令は、それぞれ所管する保育施

設の特性に合わせながら、互いの整合性を見出し改訂されていることが理解できる。これは就学前の幼児を、保育施設の種別に関わらず、同等に小学校に接続していくねらいがあると推察できる。

本稿では、殊に幼児の表現について示された新しい3省令の改訂箇所に着目し、その相違点について考察する。また新小学校教育要領の低学年における表現活動の相違点についても触れ、今後の幼児の表現活動の指導法についても考察する。

## 2. 表現領域にかかわる3省令の変更点

### 2-1. 幼稚園教育要領

新しい幼稚園教育要領の表現領域における変更箇所は、「内容の取扱い」に見られ、以下の下線部分である。

- (1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。
- (2) 変更なし
- (3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

(1)の下線部分は、幼児を取りまく「身近な環境」のうち、「美しいもの」や「優れたもの」を、自然環境の中から「音」や「形」や「色」として見出すことの必要性が特筆されている。またそのような自

然環境に触れることで、「心を動かす出来事」を「感動」として捉え、他の幼児や教師と共有することの大切さにつなげている。これらの記述は、新幼稚園教育要領の『第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」』の「(7) 自然との関わり・生命尊重」の中の記述に対応する。その中でも「自然に触れて感動する体験」が、「自然への愛情や畏敬の念をもつ」ことにつながることは、幼児の表現活動の大切さに加え、その深まりや広がりを感じ取ることができる。

(3)の下線部分は、同「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「(10) 豊かな感性と表現」の記述に対応する。「様々な素材や表現の仕方」に親しむことは、幼児の創意工夫やチャレンジを表しており、またその「過程」を楽しむことで、表現することの「喜び」を味わうことができる。それが「表現する意欲」となり、さらに「感性を働かせる」ことにつながっていく。

これら「内容の取扱い」の(1)と(3)の変更箇所については、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を実現する資質・能力としての「思考力、判断力、表現力等の基礎」が該当する。

### 2-2. 保育所保育指針

新しい保育所保育指針では、「第1章 総則」に「4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項」が設けられた。そこには、新幼稚園教育要領と同様に「(1) 育みたい資質・能力」として、先述した三つの柱が示されている。また、「(2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」も同様に共通している。

「子どもの発達」については、乳幼児期の発達の特性や発達過程の項目が削除されたかわりに、「第2章 保育の内容」において「乳児保育」、「1歳以上3歳未満児の保育」、「3歳以上児の保育」というように、年齢ごとの「ねらい及び内容」を定めている。さらに区切られた年齢ごとの発達の概要は、「(1) 基本的事項」として示され、5領域の「ねらい及び内容」には、それぞれ「内容の取扱い」が加えられた。

「3歳以上児の保育」については、新幼稚園教育要領と共通した記述である。つまり新保育所保育指針における「子どもの発達」は、「保育の内容」に関連づけられ一体化したといえる。殊に「1歳以上3歳未満児の保育」における「ねらい及び内容」では、「子どもの発達」に関する段階的な記述を確認することができる。例えば、双方の「オ 表現」の「(ア)ねらい」の文言を比較してみたい。

「1歳以上3歳未満児の保育」

- ①身体の諸感覚の経験を豊かにし、様々な感覚を味わう。
  - ②感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする。
  - ③生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる。
- 「3歳以上児の保育」
- ①いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
  - ②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
  - ③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

表現領域における「3歳以上児の保育」のねらいは、旧保育所保育指針からの変更は見られない。つまり両者の年齢に対する保育の「ねらい」の相違は、「1歳以上3歳未満児の保育」における発達を意識した視点が加味されたと考えられる。①については、「感性をもつ」ことよりも「感覚を味わう」ことが先んじている。②については、「表現」することで「楽しむ」ことができ、③については、「表現を楽しむ」前に「イメージや感性を豊かに」する必要があることが述べられている。旧保育所保育指針で年齢ごとのねらいや内容が混在していた記述と比較し、新保育所保育指針では、発達に応じたねらいと内容が明確に示されていることが理解できる。新保育所

保育指針の「第2章 保育の内容」の冒頭では、保育所における「養護」と「教育」の見解についてそれぞれ述べ、「教育」が子どもたちの「活動がより豊かに展開されるための発達の援助」とし、「ねらい」及び「内容」が、「主に教育に関わる側面から」の記述であることを明らかにしている。

## 2-3. 幼保連携型認定こども園教育保育要領

新しい認定こども園教育保育要領においては、新幼稚園教育要領と新保育所保育指針の内容をそれぞれの年齢配分に合わせながら、改訂がおこなわれている。共通する要点として、『育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』、「小学校教育との接続に当たっての留意事項」などが挙げられる。「第2章 ねらい及び内容並びに配慮事項」では、新保育所保育指針と同様に、「乳児保育」、「1歳以上3歳未満児の保育」、「3歳以上児の保育」というように発達対象年齢を分け、それぞれの「ねらい及び内容」を示している。この記述についても共通している。「基本的事項」や「内容の取扱い」についても同様である。

## 3. 新小学校学習指導要領における「表現」の概要

新小学校学習指導要領では、保育施設の新3省令に対応するように、①知識及び技能の習得、②思考力、判断力、表現力等の育成、③学びに向かう力、人間性等の涵養を資質・能力の育成を目指すための三つの柱として定めている。この三つの柱に呼応するように、それぞれの教科における目標と学年における目標が設定されている。

まず教科としての図画工作の設定目標について考察する。

- (1) 対象や事象を捉える造形的な視点について  
自分の感覚や行為を通して理解するとともに、

材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。

(2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。

(3) つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。

したり、身の回りの作品などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができるようにする。

(3) 楽しく表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする態度を養う。

下線部分は、教科の設定目標と異なる点である。

(1) の「対象や事象を捉える造形的な視点」は「理解」ではなく「気付く」ことが第一段階である。また「材料や用具」を使うときも「手や体全体の感覚などを働かせ」ることが大切で、これは小学校低学年の児童が、幼児からの発達過程の途上であることを示唆している。(2) の「造形的なよさや美しさ」よりは、まず「面白さや楽しさ」を経験することが大切で、他の児童などによる「身の回りの作品」から、自分とは異なる「見方や感じ方」を経験し、そのことによって自分の感覚の尺度を「広げたり」する必要があるだろう。(3) の「楽しく表現したり鑑賞したりする活動」では、わかりやすい「形や色」に触れることで「楽しい生活」が実現するような期待感をもって教科に臨んでほしいという意図が込められていると考えられる。

新小学校学習指導要領では、図画工作の内容が、「A 表現」と「B 鑑賞」とに分け、それぞれの目標が定められている。「A 表現」は(1) 発想や構想について、そして(2) 技能についてである。「B 鑑賞」では(1) 自分の見方や感じ方についてである。

「A 表現」の内容について考察する。

(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して気付くとともに、手や体全体の感覚などを働かせ材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。

(2) 造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて考え、楽しく発想や構想を

「A 表現」(1)

ア 造形遊びをする活動を通して、身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に造形的な活動を思い付くことや、感覚や気持ちを生かしなが



ら、どのように活動するかについて考えること。  
イ 絵や立体、工作に表す活動を通して、感じたこと、想像したことから、表したいことを見付けることや、好きな形や色を選んだり、いろいろな形や色を考えたりしながら、どのように表すかについて考えること。

(1) のアでは、初めて「造形遊び」という言葉が出現する。この言葉は、新3省令の記述の中には示されていない。またこれまでも「造形」という概念では登場していない。アの表記でイメージできる活動は、例えばフロッターージュと呼ばれるモダンテクニックの一つの技法である。落ち葉のような「身近な自然物」を「人工の材料」であるクレヨンで擦りだし、さまざまな色でフロッターージュしたものをコラージュする。この活動は幼稚園や保育所であれば、幼児参加型の壁面装飾として成立する。イの表記についても同様である。モダンテクニックは、どの技法も偶然性が高く、意匠の差は表れにくいいため、幼児には人気のある活動である。小学校の低学年であれば、楽しさと自由度の高い活動ほど主体性が発揮できると考える。

#### 「A 表現」(2)

ア 造形遊びをする活動を通して、身近で扱いやすい材料や用具に十分に慣れるとともに、並べたり、つないだり、積んだりするなど手や体全体の感覚などを働かせ、活動を工夫してつくること。  
イ 絵や立体、工作に表す活動を通して、身近で扱いやすい材料や用具に十分に慣れるとともに、手や体全体の感覚などを働かせ、表したいことを基に表し方を工夫して表すこと。

(2) のアの「並べたり、つないだり、積んだりする」ことは、幼児期の発達過程上で見られる行動

である。また「手や体全体の感覚などを働かせ」ることは、手や腕の快楽的運動としてスクリブルを描く幼児期からの発達過程の途上であることを表わしている。例えばクレヨンや水彩絵具のような「身近で扱いやすい材料や用具」を扱いながら、身体感覚全体を使うダイナミックな造形活動は、保育施設でもおこなわれており、小学校の低学年においても、そのような感覚的な造形活動を延長しておこなうことに対し、保育施設からの接続が意識されていることを感取できる。

#### 「B 鑑賞」(1)

ア 身の回りの作品などを鑑賞する活動を通して、自分たちの作品や身近な材料などの造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げること。

「B 鑑賞」では、「自分の見方や感じ方を広げる」という一つの目標が示されている。上級生や同級生、あるいは卒業生の寄贈作品などの「身の回りの作品」を鑑賞し、模倣的な鑑賞態度によって、素材に対する親近感をもち、自分が「表わしたいこと」を見つけ、それによって「表し方」を工夫することが求められている。

「A 表現」と「B 鑑賞」の共通事項として求められる内容は以下のとおりである。

ア 自分の感覚や行為を通して、形や色などに気付くこと。  
イ 形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。

「造形遊び」や「絵や立体、工作」をおこなうことで、さまざまな経験の中から、「表し方を工夫」し、「形や色」の豊かさに「気付く」ことが求められている。

またそれらをもとにしながら、「自分の見方や感じ方を広げる」ことによって、自分なりの「イメージ」の形成につながっていくと考えることができる。

#### 4. 「養護」と「教育」から考える改訂の視点

新しく改訂された3省令のうち、新保育所保育指針は、「養護」と「教育」の両面からの保育を明確に打ち出している。先述したように、新指針では「子どもの発達」の章が削除されたかわりに、「保育の内容」の章では、発達に合わせて年齢を区切り、その年齢ごとの「基本的事項」、「ねらい及び内容」、「内容の取扱い」を示すことで、それぞれの発達に対応した保育をおこなえるよう配慮している。「養護」については、「保育の内容」から最初の「総則」の章の「2 養護に関する基本的事項」の冒頭に「(1) 養護の理念」として打ち出された。そこでは、「保育所における保育は、養護及び教育を一体的に行うことをその特性とする」としながらも、「保育全体を通じて、養護に関するねらい及び内容を踏まえた保育が展開されなければならない」とあり、同章に記された「教育」とは一線を画することが明確に示された。また旧指針の後半に章立てられていた「保育の計画及び評価」についても、「2 養護に関する基本的事項」のすぐ後に配置され、「指導計画」としての詳細な改訂を受けている。

一方で「教育」については、「4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項」の「(1) 育みたい資質・能力」に示された三つの柱によって、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として提唱されている。これは3省令共通の文言となっている。また平成20年3月に厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課から各自治体の長に通知された「技術的助言」の「保育所保育指針の施行に際しての留意事項について」では、「小学校との連携について」、「保育所児童保育要録」の「小学校への送付が定められる」などと記されているが、新指針においては、「保育

の内容」の章内に「4 保育の実施に関して留意すべき事項 (2) 小学校との連携」として、「幼児期に終わりまでに育ってほしい姿」の共有の必要性が明記され、「保育所保育と小学校教育との円滑な接続」が求められている。つまり新保育所保育指針では、保育所の特性である「養護」性をもっとも重要視しながら、小学校との連携、並びに円滑な接続を意識した「教育」についても必要不可欠な保育の要素として位置付けているといえる。このことは幼稚園と認定こども園においても自明である。

#### 5. まとめ

新しい3省令は、三種の保育施設に対し、小学校への円滑な接続を共通の課題として改めて提言した。それは文言の表現上の統一を図っただけではなく、それぞれの保育施設の特徴を活かしながら、幼児の育ちと学びを第一優先にした整然性を目指したものといえる。今回の改訂では、幼児の表現活動に大切なことは、自然体験から多くの豊かさを得られるということと、「表現して楽しむ」ために、「表現の仕方」を工夫したり、様々な素材に触れるといった、幼児を取り囲む環境の大切さに着目している印象を受けた。自然環境はもとより、園庭や保育室の構成要素である物的環境、あるいはそれらを計画する人的環境、また学校行事のような社会的な事象のすべてが、幼児を成長させる大切な要素として、保育者は捉えなければならない。また幼児は、「表現して楽しむ」ことによって、これまで何気なく接していたものに対する「形」が「色」として、あるいは「色」が「形」として「気付く」ことができ、それらが「自分のイメージ」として形成されることが期待されているのである。保育者は、幼児のこのような特性が十分発揮されるよう、「楽しむ」ことのできる環境構成や助言を意識的におこなうことが必要になってくるだろう。

これからの保育者に求められる姿は、それぞれの保育施設の特性を踏まえながら、「養護」と「教育」

のバランスを図り、なおかつ小学校以降の成長する姿をイメージできるような保育をおこなうことが求められていることは明らかである。

### 参考資料

1. 「平成二十九年文部科学省令第二十号 学校教育法施行規則の一部を改正する省令」  
「学習指導要領について」文部科学省初等中等教育局教育課程部会、平成29年4月。
2. 「保育所保育指針の公示について」厚生労働省雇用均等・児童家庭局、平成29年3月31日。
3. 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領の全部を改正する告示の公示について」  
内閣府子ども・子育て本部、文部科学省初等中等教育局、厚生労働省雇用均等・児童家庭局、平成29年3月31日。
4. 汐見稔幸／無藤隆『〈平成30年施行〉保育所保育指針 幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 解説とポイント』、ミネルヴァ書房、2018年5月、初版第1刷。
5. 厚生労働省『保育所保育指針解説書』、株式会社フレーベル館、2008年11月、初版第5刷。
6. 文部科学省『幼稚園教育要領解説』、株式会社フレーベル館、平成20年10月、初版第1刷。